



Title	井元先生の思い出
Author(s)	林, 千宏
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 110-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

井元先生の思い出

林 千宏

私の井元先生の思い出は1998年の秋、大阪大学での日本フランス語フランス文学会全国大会の準備の時までさかのぼる。当時は立て看板も印刷ではなく手書きで準備していたが、それを達筆な井元先生が言文1階にあった会議室で大きな紙を広げ、次々と仕上げていくのを私を含む学生何人かで眺めていた。その見事な筆さばき以上に印象に残っているのが、先生お得意の小品である。一つ看板を仕上げるごとにおもむろにポケットからトランプを取り出し、ややぎこちない手つきで、タネが見えそうなところを巧みな話術でけむに巻き、我々を大笑いさせつつ披露してくださった。その後私は2017年に言語文化研究科に着任し、5年後の2022年、ほぼ四半世紀を経て再び井元先生と全国大会の準備をすることになった。大変なはずの準備も井元先生と一緒にいるとなぜか大笑いしてしまう。そして今回もまた、楽しかったという思い出だけが残っている。

井元先生の特技は習字と小品にとどまらない。他にも、囲碁、将棋、体操、スキー、合唱、パソコン制作、プログラミングなどの特技をお持ちである。「面白そう」と思ったら迷わず飛び込んでいるうちに何でもできるようになってしまった、ということなのだろう。例えば私が読んだ本、見た映画、ドラマの話をして、次にお会いした時にはもうその本を読んでいるし、映画もドラマも見ておられる。とにかく井元先生にとっては、ご自身の「面白そう」を感知するセンサーに引っかかったものを、そのままやり過ごしてしまうなどあり得ない。いつも好奇心で一杯のきらきらした目で「それ何?」「どうして?」とお尋ねになるのである。

だから井元先生は、いつも率直で、曇りのない目であらゆる事柄を見ておられる。そしてこちらが話すことが少しでも腑に落ちないと「何で?」と、まっすぐの目で質問されるのだ。そんな問いかけに、いつもはっとさせられ、自分が様々な先入観にとらわれていたことに気づく。そして、一体自分は今まで何をそんなにこだわっていたのかと心がすっと軽くなる。まるで小品のように、井元先生に、ほら、と気づかされるのだ。

以前言文棟の耐震工事による改装の際に、各国語の教員交流室をなくすという案が出たことがある。この計画は多くの先生方の反対で取りやめになったが、その時井元先生は、「この部屋は僕にとってはオアシスなんだから」と仰っていた。私もまったく同意見だった。だが最近ふと気づいたのは、私にとっては「井元先生がいる交流室」こそがオアシスなのだということである。大笑いをし、心が軽くなって、もう一息頑張ろうと思える場所。そんなオアシスが消えてしまわぬよう、井元先生、これからも私たちの心を潤しに来てください。（大阪大学教授）